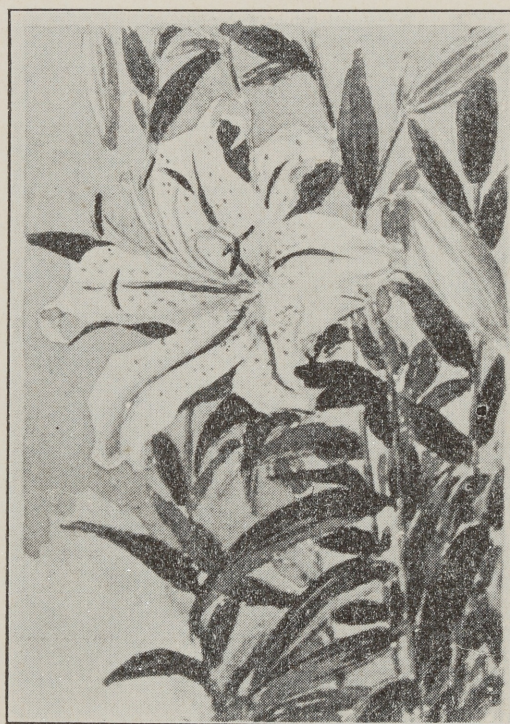


これ昨今小生の境遇、困難の内又自から喜悅あり、苦痛の裡又自ら希望あり、御推察下され度候。

本日早朝藤村氏來られ候、小生未だめしなも炊かず候砌、ダシヌケにて實は閉口致候へ共、他の人にては無之、繪など見せ、漸やく火をつくり茶など入れ、種々様々の話出て申候、話いよ／＼出て、愈佳境に入り申候處、藤村氏曰く、君未だ食事前なれば私の家に來り朝飯を食し玉はずやと、小生直ちに其厚意に従ひ、少し冷つく朝風に吹かれつゝ、瓢箪池なる氏が庵に參り候、小生が宿より僅かに二町に不足、時間にして僅に五六分間にて達す、

道にもやはり話は絶えず、家に入りても未だ盡きず、時に氏は一冊の手帖を出され申さるゝやう、私は毎夕雲の研究を致し居候とて、形の變化色の變化、一々細詳に記載しあるものを示され申候、其注意の周到なる一驚を喫し候、小生が知れる畫家のうち、未だ如此研究に熱心なる人一人も無之候、天色の研究に熱心なる人、却て是に畫家の内に見ずして文人の内に見るは寧ろ嘆息いたし候、世の中には陰然如此人があればこそ、眞面目の畫家も幾分の希望あるを認め候、兎に角に、下手な畫家より少しく氣概ある文學者などの方途に好き友に御座候、一



三條千代子筆

は文字を以て天然を歌ひ、一は色彩を以て天然を畫く、其手段に於ては多少相違こそあれ其根原は即ち一に御座候。まだ／＼有之候以下次回に申上べく候。

此書面は過日認め候七尺の代りとして差上候、惣一丈に御座候。

三十二年七月信州小諸にて

寫生旅行家のために

△足の甲と裏へ樟腦油をよく塗つて置くと疲れが出ぬとの話（また試みず）

△三里の灸點は効があるやうだ

△草鞋懸といふ足袋は少々大ぶりに作つて置くべし、水に入つた後は縮むため穿けなくなる

△流れを徒渉するには川幅の廣くして緩やかな處を選ぶは勿論である、そして川上より川下へ斜に渉る方が無事である、丈夫な杖を一本持つてそれを突いてゆけば足をとられて轉ふ憂がない

△腰から上の水は經驗なき人は決して徒渉すべからず  
△急流を渉るには重い石を抱いてゆくと足に力がはいつてよいとのと